

雑 感

西村紀三郎

10年前を思い出した。30周年の際も一文を求められて『経済学論集』についての記憶を記した。私の雑文よりも綿密確実な『研究論集』以来の総目次が載り、学部の研究活動の旺盛さが証明された。10周年の記念が『研究論集』の刊行であった。20周年では学部の名称が商経学部から経済学部に変更されたことの意味も加えて、笠森学部長がこの20年間の研究成果を紹介する挨拶文を載せられた。『経済学論集』と改題された第1号である。20年前は日本全体を騒がした大学紛争の最中であり、この不安定の雰囲気の下でも学部の研究成果が着実に積上げられていた証左の記念号でもあった。

30周年記念号には吉沢・永田両先生が長文を寄せられた。大学の、経済学部の、そして先生個人の苦闘の30年を吉沢先生が紹介され、永田先生は大学紛争までの苦心を淡々と記された。いずれも当時駒澤大学で生活した者には強く心に残る一文であった。40周年を迎えた今、両先生のような一文を提供できるかと自らに問うたとき、答は「否」である。しかし何かを記さなければならぬ。

学部教授会規程が作られて今年には20周年にあたる。全学教授会規程を含めた教学諸規程が整備されて、教学体制が刷新された後の本学の内容充実が刮目すべきである。それだけにこの諸規程整備を果たした昭和43年の刷新委員会の熱意と努力は忘れることができない。規程らしいものが何もない状況のもとで、白地のキャンパスに理想の学園像を描いたとも言える作業であっただけに、教職員の意欲は極めて旺盛で、夏休み返上の会議の連日という精進であった。諸規程整備は合理化、近代化をも果たした点で、諸大学にも例を見ない偉業と信じている。

公選の学部長制と学部教授会の確立によって、この20年間の経済学部の活

動はその質において、それ以前の20年に比肩を許さぬものと思う。しかし私個人としては、とくにこの10年に限ってみると、気力のおとろえもあってか、これというものが無い。吉沢先生、永田先生、それに長谷川先生と、長年学部のために尽力された先生方を失ったことがそうさせたのであろうか。

研究館のことを記そう。学部長の際と教務部長の際に研究館の建設に関係した。専任となった昭和41年の秋に提供された研究室は、お世辞にも研究室とは言えなかった。体育館の一角の奥の二部屋を教授用に充て、入口に近いところに助教授、講師等数名の机を置くという形のもので、若手の先生方は窓のない場所をあてがわれていた。42年からは今の7号館の5階に移った。二人部屋であったが大いに改善された。しかし年輩の先生方には5階ということの負担は大きかった。二人部屋のお相手が吉沢先生であったから、私は吉沢先生から駒沢大学について非常に多くのものを吸収した。吉沢先生は文字通り駒沢大学で生きておられた。

学部長になる少し前から研究館建設の方向がきまり、その委員となって当初から関係した。当局の当初案にはエレベータがなく、各部屋も奥行が浅く間口の広い規格であった。二人部屋を建前としていた当局案に対して、研究室を個室にするための努力が積み重ねられた。奥行を深くし間口を狭めることで室数を増加させる工夫もした。共通の努力目標があった。

それから約10年、新しい研究館建設については、教務部長という立場のゆえもあろうが、よりよきものを作るという情熱が乏しかったように思う。学部ごとの利益を追い求めて終始した印象が残っているからである。教学の諸条件が整備され、恵まれた環境のもとで学園生活が営まれるようになって、教員それぞれに教育、研究につとめ、成果をあげているのであろう。それにもかかわらず、この10年についての印象は、それ以前の時期の印象に比して何かうすいものが多いのはどうしてであろうか。私自身のおとろえの結果である面は間違いのないところであるが、単に私の印象に止まるものであればよいがとも思っている。また私の印象に止まるものであってほしいと念じるこのごろである。